

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-11C	160-11	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Consumption of alcoholic beverages in adolescence and adulthood and risk of testicular germ cell tumor. 青年期および成人期におけるアルコール消費と精巣胚細胞腫瘍		
執筆者		
Biggs ML, Doody DR, Trabert B, Starr JR, Chen C, Schwartz SM.		
掲載誌		
Int J Cancer. 2016 Dec 1;139(11):2405-14.DOI: 10.1002/ijc.30368		
キーワード		PMID
アルコール飲料、疫学、非セミノーマ、セミノーマ、精巣胚細胞腫瘍		27474852
要 旨		
<p>精巣生殖細胞腫瘍 (TGCT) の病因は依然として不明であるが、出生後の環境または生活習慣因子が関係している可能性が示されている。アルコールが、TGCT のリスクと関連するかを検討するため米国人集団データによる症例対照研究を行った。18 歳から 44 歳の TGCT 症例 540 例および、年齢が一致した対照 1,280 例のデータである。参加者には、基準日 (症例においては TGCT 診断日、対照においては対応する日) の 5 年前および学生時代 (7-8 学年と 9-12 学年) の時点でのビール、ワイン、酒類の消費について個別に質問を行った。統計解析は、TGCT リスクとアルコール飲料消費との異なる期間、飲酒量総量および特定のアルコールタイプ、セミノーマ、非セミノーマ別個別のオッズ比および 95%信頼区間を推定するロジスティック回帰分析を使用した。診断基準日の 5 年前の非飲酒者と比較して、1 週間あたり 1-6 ドリンク (1 ドリンクはビール換算で中ビン半分 (250ml)、日本酒換算で 0.5 合)、7-13 ドリンクおよび 14 ドリンク以上の飲料のオッズ比(95% CI)は 1.20 (0.85, 1.69)、1.23 (0.81, 1.85)および 1.56 (1.03, 2.37)であった(傾向 $p=0.04$)。9-12 学年のアルコール消費の対応する結果は、1.39 (1.06, 1.82)、1.07 (0.72, 1.60)、1.53 (1.01, 2.31)であった(p-trend=0.05)。7-8 学年において飲酒するものは多くなく、TGCT との統計的に有意な関連は観察されなかった。基準日の 5 年前のアルコール摂取との関連は、セミノーマより非セミノーマの方が強いと思われたが、両者に統計学的有意差はなかった ($P \geq 0.10$)。異なるアルコール飲料別の検討でも全体の結果と同様であった。このことから、アルコール飲料の消費は、TGCT リスクの増加と関連している可能性が示唆された。</p>		